

台北「故宮博物院」に見る古代と現代中国

陽光新聞社・顧問
塩澤宏宣

「台北国立故宮博物院一神品至宝」展が6月24日から東京国立博物館で開催されるという記事を見ました。「故宮」という文字を見ると、私の感情は反射的に古代の中国に迷い込みます。

私が初めて台湾に行ったのはいつだったか…。テレビ番組取材の立会いでした。台北の繁華街にはオートバイが溢れ、家族が4～5人一緒に乗っている姿に驚いたことを思い出します。同行した仲間と「故宮」を見学しました。展示されている書画・器物にタダタダ圧倒され後日、友だちに「故宮見物」の話をする際、何を見たのか全く思い出すことができませんでした。

次の台湾行きは大分間がありました。街を走る乗り物は自動車に変わり、駐車場は整然としていました。有名な台湾プラスチック社が所有する長庚記念病院(創業者の王永慶氏の母のために創立)との商談でした。紹介者は何既明さん。李登輝氏の友人で、司馬遼太郎の「街道を行く(台湾篇)」にも登場する方で、陳舜臣氏のいところでもあるとのことでした。

その何さんと飲んでいた折、「君は軍歌をいくつ知っているか」と聞かれましたので、「2～3曲ぐらい」と答えました。すると彼は「私は40曲知っている!」と。これにはビックリ。「故宮」のことを話すと、「あれは蒋介石が“いいものだけを盗んできた”のだ」とのこと。京都大学医学部出身のインテリで、会話は終始「見事な日本語」でした。なおその時の故宮での思い出は有名な「翠玉白菜」でした。今回の展示会でも期間限定で鑑賞できます。

故宮博物院が収蔵する文物は、中国歴代王朝の歴史といわれます。現在それらの財宝は台湾と北京に分散されており、先の何さんの言う通り台北

には「いいモノ」があります。ここで私が「いいモノ」という意味は、あくまでも私の価値観(私感)です。北京の故宮博物院へは1回しか行っていませんが、台北の時の感激はありませんでした。展示方法が違ふというか、中国人の自慢したいところが私の趣味に合わないのかもしれませんが。

歴代皇帝は、古代の青銅器から玉器・書画・陶磁器・金工・漆工・古書籍などを引き継いできました。その収集に一際熱心であった皇帝が二人います。北宋の徽宗と清の乾隆帝です。

徽宗は「風流天子」と呼ばれ、芸術にうつつを抜かして国を滅ぼしたと言われていますが、その功績は素晴らしいものです。自らの書体を創出し「瘦金体」として多くの書を残しています。唐の時代から宮廷にあった絵画制作機構(画院)を本格的に設置し、宮廷画家の育成にも努めました。

清朝六代の乾隆帝は清朝全盛期の皇帝です。全国の過去の書物を一つのシリーズにしたという壮大な事業を成し遂げました。古典3400種を筆写し「経・史・子・集」に分類、装丁も色分けして1セット3万6000冊の「四庫」を完成しました。その他では南北の宋や元、明の文人の作品を網羅的に蒐集し、現代に引き継いでいます。

故宮博物院の保存品は歴代皇帝が「お抱え作家」に作らせたものですから、作者やその謂れが確かなものです。大切に保管されてきましたから、傷一つない完璧な作品ばかりです。お抱えの作家はおそらく代々家業を継いでその「秘伝」に基づいて制作したのではないかと思います。いわゆる庶民とは違う立場にいたと思います。その意味では宮廷文化・芸術です。それぞれの時代の庶民文化をこれらの作品から推察することはできないでしょう。素晴らしい作品群を前にして「中国の庶民文化」はどんなものだったのか?

今日、偉大なる中国の皇帝文化の一端は、台北と北京の故宮博物院に納まっていますが、こうなるまでには中国中を移動するという「風雪の80年」がありました。

1911年、1644年から267年間続いた清朝が辛亥革命によって幕引きをしました。しかし、そ

の後12年間にわたって最後の皇帝宣統帝は「財宝」とともに紫禁城に住み続けていました。その財宝は約1年掛けて整理し、新設することが決まった故宮博物院で公開することになりました。整理作業はその後も続き一応終了したのは7年後の1930年だそうです。それだけで膨大なコレクションだったことがわかります。

収蔵物の一般公開は始まりましたが、その直後の1931年満州事変が勃発、上海事変や満州国建国などの混乱に際して「故宮財宝」の中国大移動が始まります。この移動劇は述べ14年間続き、その移動距離は1万キロに及んだといわれます。

まず「南遷」北京から上海に送る作戦です。以下に「台北国立故宮博物院を究める」板倉聖哲・伊藤郁太郎著(新潮社)より抜粋します。



上海のフランスとイギリスの租界へ5回に亘って送られた。述べ1万9557箱という膨大な量を運ぶ。しかし上海は海に近く湿気が多いということで南京に倉庫を作り移転。1937年7月7日蘆溝橋事件が勃発すると西に避難する。その旅は長沙、貴陽、安順、更に巴県・重慶へ。

はるか西の四川省を目指した。日本軍に追われながら1万6735箱の逃避行を終了した。対日戦終了後は、国民党軍と人民解放軍の内戦勃発。内戦3年目の1948年11月7日、徐州南部で両軍が激突し、人民解放軍が勝利する。国民党軍は直ちに秘密会議で優品600箱を台湾へ移送することを決定した。

重慶から南京へは軍用列車で運ばれた。南京から基隆(台湾)までは3陣に分け、海軍輸送船や商船をチャーターして運んだ。その数2972箱と北京から南遷した時のわずか2割に過ぎないが、貴重なものばかりだ。そして、1965年11月12日に台北市外双溪に現在の故宮博物院がオープンし、困難を極めた長い旅が終わった。



汕頭の刺繍は日本でも有名です。香港からのおみやげで人気があるようです。ベルギーやオランダ、スイスなどのヨーロッパの刺繍とは味わいが異なり、東洋の香りが好きです。私の知識では、そ

の東洋的な香りを完成させた時代が宋(北宋・南宋)朝、明朝、清朝ではないかということです。水墨画・山水画・花鳥画といった中国絵画の原点は北宋時代にあると思いますが、その時代の代表作がほとんど台北故宮にあるそうです。世界的に有名な青磁も北宋です。汝窯の青磁は現存する作品は70数点しかないそうです。そのうち21点が台北故宮にあり、今回「輪花碗」が出展予定です。

「汝窯の青磁」は南宋の張俊が時の皇帝高宗に贈り物をした際の目録に初めてその名が出てきます。また「汝窯は宮中の禁焼(御用瓷)であり、貴重な瑪瑙を粉にして釉薬に混ぜ込んである」という記述があることから、当時から「皇室御用達」だったのでしょうか。日本では「景德鎮窯」が有名ですが、ここが主流になるのは明代からのようです。

私は現代の中国の人々に、声を大にして言いたいと思います。古代中国の人々が残したこれらの偉大な宝物を残してくれたのに、なぜ「模造品ばかり作っているのか」と。ある調査によると現代の若者は誇りに思うことの一番に「4大発明」を挙げているとのこと。確かに「紙・印刷技術・火薬・羅針盤」という発明や、故宮博物院に残された「財宝」の数々は、世界に誇るべきものです。古代中国人が成し得た物事を現代中国人ができないはずはありません。

私は30余年に亘ってマーケティングを専門にしてきました。マーケティングは専門用語ですが、最近あちこちで使われています。要約すれば「製品を商品にする」戦略・戦術をいいます。企業の都合でつくる「製品」ではなく、消費者が欲している「商品(売れる、もしくは、買いたい)」ということですが…。

今流行り言葉でいえば「ブランド化」もその一部です。「汕頭刺繍」も「景德鎮窯」も有力なブランドです。外国へ出かけて「売れそうなものを探し」「それを真似する」ではご先祖様に申し訳ないと思います。現存する「Made in China」の中にもいいモノがあると信じています。そうした「モノを商品化」すれば世界に誇れる「Made in China」が誕生します。以上が故宮博物院の品々を思い起こしての雑感です。